

群 教 ゼ	G10 - 01
	平 16.220集

# 相手のことを思いやり親切にしようとする 心情を育てる道徳指導の工夫 福祉的な体験活動と関連させて

特別研修員 馬場 重夫 (前橋市立城南小学校)

## 《研究の概要》

本研究は、道徳の時間を総合的な学習の時間の体験活動と関連させて、相手のことを思いやり親切にしようとする心情を育てる道徳指導の工夫について、実践的に研究したものである。まず、相手の立場から親切にすることの大切さに気付かせる。次に、体験活動を通して、進んで親切にしようとする心情を育てる。最後に、盲学校との交流を振り返り、相手のことを考えて親切にしようとする心情を育てる学習を中心に実践を行った。

【キーワード：道徳 小学校4年 思いやり親切 体験活動 交流】

## 主題設定の理由

物の豊かさを求める時代から、心の豊かさを求める時代へと進んでいる。今、思いやり親切の心を育てることは特に大切にしたい価値である。思いやり親切は、思いやりのある行為に触れて育つものであり、人を思いやる行為は、本来、日常生活において自然になされるものである。しかし、今日の変化の激しい社会においては、児童の自然な発達を阻害している現象が多く指摘されていて、児童のおかれている環境は、次第に思いやりの心を育ちにくくしている。また、思いやりの心をもちながらも、いざ行動する時になると恥ずかしい、どうしたらいいかわからないなどの気持ちが先に立ってしまいなかなか行動に移すことができないことが多い。しかし、人は思いやり親切を通しての心と心の結びつきを必要としている。多くの人とのふれあいを通して、誰に対しても温かく接する心を育てていきたいと考える。

本校の4年生では総合的な学習の時間『もっと仲よくなるために(福祉)』で、ブラインドウォークの体験、盲導犬ユーザーの先生から話を聞き目の不自由な人の生活や思いについて調べる体験、盲学校の児童との交流などの福祉的な体験活動が展開される。今までの総合的な学習の時間では、視覚障害者に対する理解を深め、盲学校との交流時に友達に対して温かく接することができたが、日常生活の中でその思いやりの心をどのように主体的な実践に結びつけるかという課題があった。

そこで、総合的な学習の時間の体験活動と道徳の時間とを関連させ学習することによって、道徳的価値の自覚を一層深め、主体的な実践に結びつけていく心情を育てることができると考えた。つまり、福祉的な体験活動中での気付きや考えを、一つの資料をもとに話し合い交流を通して深め、次の体験活動に生かす学習を行うことで、相手のことを思いやり親切にしようとする心情を育てることができると考えた。具体的には、まず、相手の立場から親切にすることの大切さに気付かせる。次に、体験活動を通して気付いた思いやり親切について内面化、一般化を図り、目の不自由な人や困っている人に対して、進んで親切にしようという心情を育てる。最後に、盲学校の児童と交流を振り返り、相手に親切にするよさに気付くことで、相手のことを思いやり親切にする心情を育てていきたいと考え本主題を設定した。

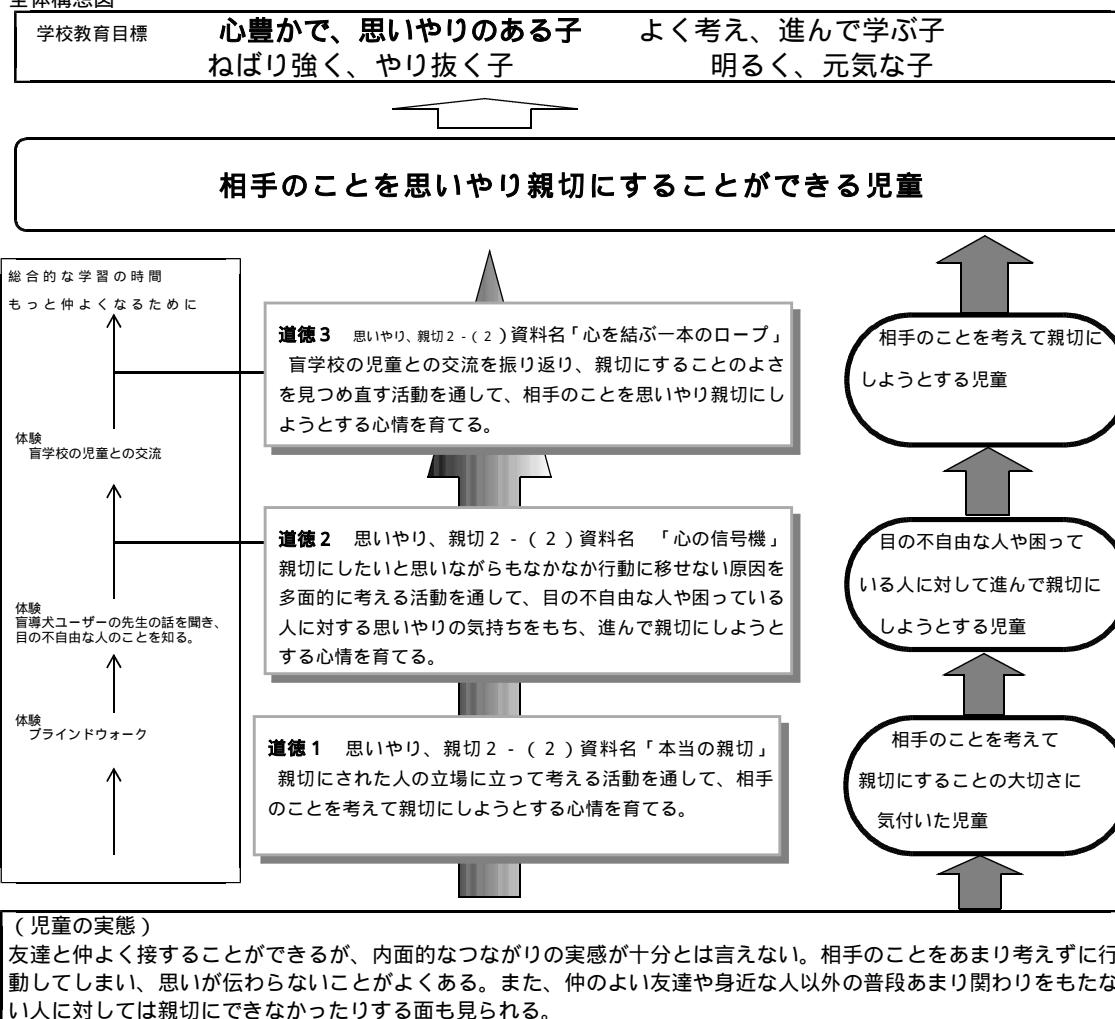
## 研究のねらい

道徳「相手のことを思いやり、親切にする」〔2 - (2)〕において、道徳の時間を総合的な学習の時間「もっと仲よくなるために」の体験活動と関連させていくことが、相手のことを思いやり親切にしようとする心情を育てることに有効であることを明らかにする。

## 研究の見通し

- 1 道徳の時間1 主題名「親切な心2 - (2)」において、資料「本当の親切」の児童の身近で起こる何げない親切の役割演技から、親切にされた人の立場から考える学習をすることで、相手のことを考えて親切する大切さに気付くであろう。
- 2 道徳の時間2 主題名「進んで親切に2 - (2)」において、ブラインドウォークの体験から目の不自由なことの不便さを実感し考えることができるであろう。その後、資料「心の信号機」を使い主人公の心情を考えたり、盲導犬ユーザーの先生との交流から目の不自由な人に対する手助けの必要性を知ったりすることで、進んで親切にしようとする心情を育てることができるであろう。
- 3 道徳の時間3 主題名「相手のことを思いやり親切に2 - (2)」において、資料「心を結ぶ一本のロープ」を基に、盲学校の児童との交流を振り返り、親切にすることのよさを見つめ直すことで、相手のことを考えて思いやり親切にしようとする心情を育てることができるであろう。

全体構想図



## 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 相手のことを思いやり親切にしようとする心情の育成について

思いやりはどうすれば相手のためになるのかよく考えること、親切は思いやりに基づいた行動と捉え、道徳的实践につなげていける児童を育てるために以下の児童の姿を考える。

##### ア 相手のことを考えて親切にすることの大切さに気付いた児童

親切はおせっかいや相手の気持ちを無視したものではないことを理解し、相手の立場から親切にすることの大切さに気付いている。

##### イ 思いやりの気持ちを持ち、進んで親切にしようとする児童

困っている人を助けたいと思っても、いざ、行動するとなると恥ずかしい、どうしたらいいかわからないなどの心理状況を克服し、親切にしようとする実践への意欲をもっている。

##### ウ 相手のことを考えて親切にしようとする児童

どうすれば相手のためになるのかを考えて接しようとしている。

#### (2) 総合的な学習「もっとなかよくなるために」での体験活動との関連について

総合的な学習の時間「もっとなかよくなるために」では、体験活動や盲学校の児童と交流をしながら、みんなが互いに助け合っていることを理解し、誰にでも思いやりをもって接するとともに、多くの人が幸せに暮らせる社会について考え、自分にもできることを実践していくことをねらいとして学習している。この学習を通して、次の体験活動と関連させる。

##### ア ブラインドウォーク

何も見えない状態での不安感や不便さを体験するなかで、目の不自由な人の不安感や不便さを実感し、誰かの助けが必要なことに気付く。

##### イ 盲導犬ユーザーの先生の話

目の不自由な人々の生活の様子や思いを知るとともに、まわりの人の手助けが必要な場合もあることを理解し、みんなが幸せに暮らせる社会について考えようとする。

##### ウ 盲学校の児童との交流

道徳的实践の場であるとともに、盲学校の友達のよさに気づき、相手のことを思いやり親切にすることのよさを実感する。

### 2 実践の概要および結果と考察

#### (1) 相手の立場から考えさせる学習をすることで、相手のことを考えて親切にすることの大切さに気付くことができたか。

##### ア 実践の概要

道徳1として、資料「本当の親切」を使い、児童の身近で起こりうる事例を取り上げ、絵の吹き出しに言葉を書き込んだ。それを隣の児童と交換し、代表が役割演技を行い感想を出し合った。次に、親切にされてうれしいと感じる時と嫌だと感じる時の違いを確認し、相手の立場に立って親切にすることの大切さを考えた。さらに「本当の親切」とは何かについてワークシートに書き話し合った。最後に、自分が親切にした経験を思いやりカードに書いて意識の継続化を図った。

##### イ 結果と考察

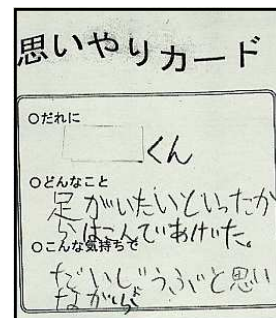
親切をしている場面の役割演技で、親切にされた児童は「嫌だった。」「有り難かった。」と全く違った感想を言った。ここで親切にされて嫌だと感じる時とうれしいと感じる時との違いを聞いた。「困っていない時」「無理やりにされた時」は嫌な気持ちになるが、「本当に困って

いる時」「本当に自分の気持ちを考えてやってくれる時」はうれしいと感じると児童は答えた。自己を投影して考えるようにしたことで、親切にされた人の立場に目を向ける大切さに気付くことができたと考える。次に、「本当の親切」とは何かについて尋ねると、多くの児童が相手の立場から親切にすることや自分に置き換えて考えることをワークシートに書いていた。(資料1)

### 資料1 「本当の親切」とは何か。

- ・相手が本当にうれしいと思うこと(14人)
- ・相手が本当に困っている時に助けること。(6人)
- ・自分がされたらうれしいと思うことをすること(4人)
- ・本当に相手の気持ちを考えてやってあげること(2人)

A男は「本当に困っている人にやさしい気持ちで、心から親切にすること。」と親切にする人の気持ちの大切さを書いている。また、B子は「困っている人がいたら、(相手が)ありがとうという気持ちになるようなことをしてあげ、(相手に)うれしいと思われること。」と相手の気持ちを考えて親切にする大切さについて書いている。これらは相手の立場から考える大切さを認識できた結果であると考え。最後に、自分が親切にした時のことを振り返ると、相手のことを考えながら書くことができた。(資料2)



資料2 思いやりカード

(2) ブラインドウォークの体験や盲導犬ユーザーとの交流を生かし、自分のこととして思いやり親切について考える学習をすることで、進んで親切にしようとする心情を育てることができたか。

#### ア 実践の概要

道徳2として、総合的な学習の時間でのブラインドウォークの体験を振り返り、目の不自由な人にとっては不便なことが多くあることに気付いた。資料「心の信号機」を使い、交差点で信号がわからず道路を渡れないで困っている目の不自由な人に出会った主人公が親切にしたいという思いがありながらもなかなか実行できない心情を考えた。そして自分だったらどうするか考えるとともに、役割演技を通して疑似体験をした。その後、盲導犬ユーザーの先生の手紙を聞き、自分ができることについてワークシートに書いた。

#### イ 結果と考察

導入では、児童にブラインドウォークの時の写真を見せることで体験を想起させ、目が不自由なことがいかに不便なことであるかという意識を喚起した。次に、資料で目の不自由な男の人が信号機のある交差点を渡れずに困っている様子から「誰かが教えてくれるのを待っているのではないかな。」「ずっと渡れないかもしれない。」など相手の立場から考えることで、この男の人を手助けをしてあげる必要があるだろうとする意見が出された。主人公が手助けしようと歩き出すと足がゆっくりなってしまった時の主人公の気持ちの想像(資料3)からは、この主人公の後ろ向きな考えが多く出された。主人公の前向きな気持ちを含め多面的に捉えられた児童もいた。児童はこの主人公の気持ちに共感できる部分が多くあったと考える。また、この後に、自分だったらと質問をしたところ、「助ける」14人「助けられない」7人「分からない」8人に分かれた。それぞれの考えの代表が役割演技をすると、前に「助ける」と答えたB子は、「実際にやってみてすごく緊張した。本当は知らない人にする

### 資料3 「心の信号機」の主人公の気持ち

歩き出すと足がゆっくりになってしまったのは、  
中でどんなことを思ったのでしょうか。

勇気が出ない。  
どうやって声を掛ければよいのか分からない。  
話しかけるのがこわい。  
本当に助けられるのか心配  
おせっかひだったらどうしよう  
早く渡ってくれればいいな。  
とても緊張する。  
とても不安だ。  
本当は助けたい。  
ぼくが連れて行かなければ。



ラソン大会で完走をした視覚障害者の人の思いを聞いたところ「とてもうれしかったと思う。」「5人にはとても感謝しているだろう。」と答えた。このことから、5人の伴走者の行為や思いによって、視覚障害者のランナーを支え無事にゴールさせることができたことを気付かせることができたと考える。

その後、困っている人に親切にするためにはどんな気持ちが必要なのかについて書くこと（資料7）A男の意見は勇気をもつと同時に、相手の立場から考えることに注目して書くことができた。また、B子の意見からは自分が相手のことを深く考えようとしている様子が伺える。全体でも、困っている人がいたら助けようとする気持ちと答える児童が多かった。また、やさしくしようとする温かい気持ちをもつことの大切さなどの気持ちについても多くの児童が書いていた。このことより、相手のことを考えて親切にしようとする心情が育ったと考える。

#### 資料7 親切にするとき大切なことは

勇気がいる。相手が困っていたら、どう手伝ったらいいかを考える。(A男)  
どうしたのかな。どうしたんだろう。大丈夫かな。迷っているみたい。声を掛けて道を教えてあげようという人を思う気持ち。(B子)  
相手を安心させるような温かい気持ち  
自分と目の不自由な人が同じだと思って、同じ状態の目が見えないように思っ  
て、もし、本当に目が見えなかったら、目が見える人に声を掛けて欲しい。だから、きっと目が不自由な人も、目が見える人に声を掛けて欲しいと思う。  
いろんな人にやさしくしようとする気持ち。相手の気持ちを考える。助けてあげようと思う気持ち。

### 研究のまとめと今後の課題

#### 1 研究のまとめ

道徳1において、絵の吹き出しに言葉を書き込み、友達との資料交換や役割演技を行い、親切にされた人の立場や気持ちに注目させることで、相手の立場に立って考えることができた。本当の親切は、相手のことを考えて親切にすることだと気付くことができた。

道徳2においては、導入でブラインドウォークの体験を想起させることで、目の不自由な人への手助けがとても大切なことに気付いた。主人公の男の子の気持ちを話し合った後で、自分だったらどうするか意思決定をさせたことは、児童が自分の課題として捉えさせるためには有効であった。また、役割演技によってその場で実践したり見たりすることで、より深く考えることができた。さらに、盲導犬ユーザーの先生からの話や返事の手紙などからは、現実の相手の願いがよく伝わり、児童が困っている人や目の不自由な人に対して進んで親切にしようとする心情が高まった。

道徳3において交流での体験を通して、盲学校の友達の生き方のよさを感じ取るとともに、共感的に接することができた場面を振り返り、思いやり親切することのよさに気付くことで、相手のことを思いやり親切にしようとする心情を育てることができた。

#### 2 今後の課題

福祉的な体験活動と関連させ取り組んだことが、家庭や地域社会との連携の中で実践として広げられていくよう児童の体験を充実させいくことが重要である。さらに、児童が体験の中で抱いた価値を細かく見取り、様々な体験活動との関連を図っていくことが大切であると考えられる。

#### 参考文献

- ・群馬県教育研究会道徳部会『第36回全国小学校道徳研究会紀要』（2001）
- ・押谷由夫 編『豊かな自分づくりを支える 道徳の授業 4年』教育出版（2003）
- ・永田繁雄 編『研究授業小学校道徳 中学年』明治図書（2004）

